

宿泊セミナーFD分科会報告（2日目）

健康福祉学部放射線学科・准教授
関根 紀夫

2008年5月30日（金）首都大学東京FD・SDセミナー（於 大学セミナーハウス講堂、9時00分～11時00分）の内容について、以下、報告する。

1. 学習支援に関する講話

はじめに基礎教育センターの北澤武准教授より「コンピュータを活用した学習支援」に関する講話があった。講話の内容は以下の通りである。

1.1. 国内外の動向と実態

近年、国内において個々の教員の教育・研究指導能力の向上や学生に対する成績評価の管理を組織的に適切な評価をする仕組みが重視され、FDを実施する大学が年々増加した。

しかし、その手段として、なぜコンピュータを用いたのか？それは、情報通信技術の著しい進展と普及のため、情報の収集・発信・共有が容易となり、教材の配信や教員と学生、学生間のコミュニケーションが時間を問わず可能になった点にあると思われる。

実際、情報通信技術の活用によって教育支援に有用であり教員の教育力向上につながるとの報告もあり、国内外の大学でTV会議システムを用いた遠隔授業やオンライン教育が行なわれている。

この動向には、「学生のアクセス増加」「伝統的分野以外からの学生誘致」「継続・専門職教育の増大」「大学のブランド価値の上昇」「教授法改善の促進」といった戦略的意味を持つものと考えられる。

1.2. 本学の事例

学内においては、対面授業とeラーニングの融合をはじめ、対面授業の予習復習・出欠席の確認、自己学習の支援という有用性があり、ネットワークラーニングシステムが使われ、教員の負担軽減につながるとの報告がされている。

そこで講話では実際に、「情報リテラシー実践Ⅰ」で用いられているシステムの表示画面、課題提出から成績・コメント入力操作などが紹介された。

2. 学生気質に関する講話

次に学生サポートセンターの岡昌之教授より「大学教育の課題Ⅱ今日の学生気質－学生対応について」に関する講話があった。講話の内容は以下の通りである。

2.1. 生活の心理学

人間生活の3要因（レベル）として、社会的・心理的・生理的が挙げられるが、社会的要因のなかの時代的要因として近年はITが含まれてきた。

2.2. 学生気質

ひきこもり・接触障害・うつ病などの若者に見られる社会性の発達障害はPCの発達とは直接の関連はないと思われる。また、「べつに…」と他人と距離をおく裏側には複雑な感情を持っていることを知っておくべきである。

本学の学生気質は、以前は「頭がよくておとなしい」と感じていたが、最近は「パフォーマンスが上手」と感じている。

教育システムの違いや荒川キャンパスなど、同じ大学内に違った価値観をもった学生が集まる多様性に富んだ総合大学になった。今後も見守っていくとのことであった。

3. 総括

講話後、西澤潤一学長より「学生が一生を捧げるような目標を持つには教員がお手本を示さなくてはいけない。」、基礎教育センター舛本直文教授より「お互いを知り合い、財産を共有しなくてはいけない。」とコメントが寄せられた。